様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１８３８

研究課題名（和文）将来,企業による不祥事・大惨事を繰り返さないために文化を超え学習する方法論の構築

研究課題名（英文）Developing a Methodology for Transcultural Learning to Mitigate the Future Wrongdoings and Disasters by Organizations

研究代表者
築達　延征（Chikudate, Nobuyuki）

広島大学・人間社会科学研究科（社）・教授

研究者番号：５０２５５２３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：企業・組織による不祥事・大惨事が繰り返されている。不祥事・事故が起こるたびに，企業の社会的責任論および企業倫理・組織論・ 安全学等で個別に分析・研究がなされてきた。しかしながら，実務においては，その知識が学習されないのはなぜかという「問い」が立つ。本研究においては，企業・組織による不祥事・惨事を繰り返さないために，「過去の実践」から現在・将来の実践への学習理論を発展させ，さらに，越文化的学習（transcultural learning）を促進するための方法論を構築し，提唱した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
企業・組織による不祥事・大惨事に関する研究は，各領域でなされ，知識が蓄積されてきた。従来，企業・組織による不祥事・大惨事に関する研究は，企業の社会的責任論および企業倫理・組織論・安全学等の各領域でなされることが多かった。しかしながら,企業・組織による不祥事・大惨事は，業界・国を超え，繰り返されているという事実に直面する。本研究においては，企業の社会的責任論および企業倫理・組織論・安全学等の学術的知見を融合し，「学習」理論を提唱した。この学習理論は，過去から現代・未来へ向けての「時系列的」ならびに，文化・社会的文脈を超えた「越文化的」 学習を可能にするものである。

研究成果の概要（英文）：In this project, the researcher develops a theory for learning from previous wrongdoings and disasters that are caused by organizations. The necessity of developing such a theory results from historical facts where similar types of wrongdoings and disasters by organizations have been repeated. In the past, it would be true that many studies have been conducted regarding wrongdoings and disasters by organizations. However, the accumulation of knowledge has neither been integrated nor utilized because there are at least three different academic disciplines including (1) corporate social responsibility (business ethics), (2) organization theory and/or studies, and (3) safety studies. In this project, the researcher integrates different academic disciplines in order to develop a theory with which people can learn from previous practices. Furthermore, he has developed a theory for transcultural learning.

研究分野：経営学

キーワード：企業倫理　企業の社会的責任　危機管理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

企業・組織による不祥事・大惨事に関する研究は各領域でなされ，知識が蓄積されている。しかし，一方で企業・組織による不祥事・大惨事は，業界・国を超え，繰り返されているという事実に直面する。筆者は，日本での 1997-1998 年の不祥事による金融危機に関する研究を Academy of Management 学会 (1997)で発表した。その後，日本と同様の金融危機が 2002 年・2008 年にアメリカでより大規模に現出した。数年後，「繰り返される」という現象が日本の自動車メーカーから始まり，アメリカの自動車メーカー，そしてドイツの自動車メーカーという自動車産業においても，グローバルな規模で見られた。ドイツにおいては，一社のみならず，数社を巻き込んでの不祥事となった。

つまり，同様の不祥事が他社・他業界もしくは他国ですでに起こっていた。企業・組織による大惨事にしても同様のことが言え，例えば，原発事故を繰り返している。その悲劇が，自然現象が影響したとは言え，2011 年に日本で起こってしまい，2023 年春の時点でも，収束の目途が立たないでいる。したがって，不祥事・大惨事は，時空を超え「繰り返される」ため，「他山の石」とせず，学習すべき問題なのである。しかしながら，実務界においては，「他からの学習」・「過去からの学習」が活かせずにいるのではないかという仮説が浮かんだ。したがって，不祥事・大惨事を繰り返さないための学習理論・方法論を発展させる必要があるのではないかという想いに至った。

## ２．研究の目的

企業・組織による不祥事・大惨事の度にメディアが報道するが，数年後に忘却され，知識・未来への教訓として定着しない。このような状況にあっても，企業の社会的責任論および企業倫理・組織論・安全学等の分野においては，知識が蓄積されているのも事実である。ところが，実務界では活かされず，学術的知見の「学習」はどうあるべきか，という問いが立つ。企業の社会的責任論および企業倫理・組織論・安全学等の学術的知見の「学習」はどうあるべきか，という問いへの取り組みは，従来，① 企業不祥事もしくは企業による非倫理的行動の研究，② 組織による危機・大惨事の研究，③「学習」に関する研究という三つの領域に内容がまたがっていたが，融合されることは少なかった。本研究では，これら三つの領域で蓄積された知識を融合することを目的とした。さらに，学習理論として，学術研究から実践への学習の促進，さらに，実践から学術研究への知識の転換・蓄積を目指す方法論を発展させる。最後に，越文化的 (transcultural) アプローチをとることにより，「各」文化・社会的な文脈を超えて，説明が可能であり，また，学習できる方法論も提唱する。

## ３．研究の方法

企業・組織による不祥事・大惨事研究を学際的に融合させることにより,知識をさらに蓄積させ,かつ,実践・教訓への転換・普及を目指す。この知識の転換・普及は,時間・空間を超えて行う必要があり,本研究においては,その方法論を発展させるべくケース法に着目した。

ケース法は,従来,①調査法,②教材・教授法として別々に発展してきた。調査法としてのケースは社会科学の質的調査法として発展し,教材としてのケースは主に Harvard 大学等の経営学大学院の教育で行われてきた。しかしながら,従来の調査法としてのケース法にもとづく事例の記述・分析レポートでは,時空を超えての実践・教訓としての転換は困難である。ケース法は,「各」出来事の記述であり,①計量的･客観的なエビデンスの脆弱性,②検証における外的妥当性(一般化)の確立不能等の理由による。このような弱点は，ケース法の大家である Yin 等より指摘されている。

本研究においては，一般化を，論理実証主義から発展した計量的調査法でいうところの外的妥当性とはとらえず，「各」出来事から得られる知見をその文脈から離れ，知識に変換する方法論を考察した。具体的には，まず，文化・社会人類学でいうところの「文化特異性」対「通文化・全人類」の議論から文献調査・考察を始め，社会科学での「計量的手法」対「質的手法」の文献調査・考察を行った。ここでは，単なる「手法」(method)の優位性・弱点の議論にとどまらず，その土台となる「方法論」(methodology)ならびに「科学思想」(philosophy of science)まで遡った。

「各」出来事からより一般的な知識への変換方法としての学習理論に加え，現代思想の Habermas ならびに Foucault が考える学習に着目し，方法論を発展させた。最後に，越文化的学習の可能性として，「各」文化・社会での不祥事・大惨事を誘発する要因が，「他」の文化・社会での不祥事・大惨事でも発見できるのかを調査した。

４．研究成果

本研究が提唱する以前のケース法においては,①報道源を重視するジャーナリズムのような取材,②事実の記録,③質的調査法として文脈に忠実に記述・分析を行う厚い記述(thick description)を目指す研究が多かった。①②の場合,「事実の記録」として価値があるが，知識として学習へ変換することは容易ではない。③の場合,特定の文脈を「厚く」記述しすぎると,その文脈から離れた人間には無関係になる（irrelevant）というパラドックスが生まれる。その結果，当事者・関係者を除いて，単なる「出来事」として扱われ，学習にはつながらなくなる。本研究においては,このパラドックスを解消するため,ケース法にもとづく事例の記述・分析レポートを書く・読む上で，現象学・解釈学を導入した。これにより，当事者・関係者以外の人間が,「自ら」の文脈に変換し，学習に導くことが可能になった。さらに，同様の不祥事・大惨事が繰り返される歴史的要因を突き止め，学習するため，系譜学の発想を導入した。このことにより，実践から学術研究への知識の転換・蓄積学術研究，さらに，学術研究から実践への学習の促進を可能にした。さらに,言語的ニュアンス・文化背景・文脈を超え,学習する可能性も示唆した。

従来の経営学研究においては，学習理論の発展として「組織学習」の発想に基づくことが多かった。しかしながら，本研究においては，医学から発想する安全学研究にある「常駐病原体」という概念に注目した。これは人間の胃の中にいるピロリ菌のようなもので，発見し，除去しないでいるといずれ，人体をむしばませるというものである。これを人文社会科学に応用すると，不祥事・大惨事を引き起こす企業・組織にも，その「出来事」以前にすでに常駐病原体が存在しており，それに気づき・認識し，解消・消滅させる必要があると考える。ところが，気づき・認識と解決・消滅の間には，実践的に乖離があるため，医学のように解決することは困難である。

本研究においては，これを解決する方法論として，Habermas ならびに Foucault の知見を折衷することにより,新たな学習理論を発展させた。両者は,ドイツのフランクフルト学派,もしくは,フランスのポスト構造主義という現代思想の大家としてライバル視され，対比されることが多い。ところが，本研究では共通点を突き止めた。両者とも，研究活動の前半は,「批判」を土台にしていたが，研究活動の後半で「実践」に言及した学習の可能性について示唆している。さらに,倫理・規範の再構築についても示唆している。本研究では,両者が提唱する「批判」から「学習」へ転換するべく産業事故を例に「批判的学習理論」を提唱した。ここでは，産業事故から影響を受けたステークホルダーも含めた当事者が「怒り」・「絶望」という感情的応答性から,「合理性」を取り戻すレジリエンスに向かうメカニズムが学習効果につながることも発見した。

越文化的学習の可能性として,日本の企業・組織による不祥事・大惨事を誘発する常駐病原体が,他の文化・社会にも存在するのかを考察した。その試みとして，ASEAN で開催された筆者が招聘された学会において，実務家・企業弁護士・研究者とダイアローグを行った。様々な反応があったが，結果として，韓国・台湾という儒教圏に加え，インドネシア・パキスタンというイスラム圏においても同様の常駐病原体が存在しうるとの指摘があった。また，現象学的調査により，イスラム圏での企業不祥事において，文脈は異なるが，日本の企業・組織による不祥事・大惨事を誘発する常駐病原体が背後に存在していることが分かった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Nadiatus Salama & Nobuyuki Chikudate | ４．巻<br>19 |
| ２．論文標題<br>Unpacking the Lived Experiences of Corporate Bribery: A Phenomenological Analysis of the Common Sense in the Indonesian Business World | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>Social Responsibility Journal | ６．最初と最後の頁<br>446-459 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1108/SRJ-06-2021-0232 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Nadiatus Salama & Nobuyuki Chikudate | ４．巻<br>10 |
| ２．論文標題<br>Religious Influences on the Rationalization of Corporate Bribery in Indonesia: A Phenomenological Study | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Asian Journal of Business Ethics | ６．最初と最後の頁<br>85-102 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1007/s13520-021-00123-0 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Nobuyuki Chikudate | ４．巻<br>1 |
| ２．論文標題<br>The Spellbinding Power of Reinforcing Safety Myths inside TEPCO: An Analysis of Fukushima Disaster | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Academy of Management Proceedings | ６．最初と最後の頁<br>12073-12073 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5465/AMBPP.2019.12073abstract | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　5件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nobuyuki Chikudate |
| ２．発表標題<br>If Habermas Meets Foucault on Developing a Critical Learning Theory for the Preventation of Future Disasters |
| ３．学会等名<br>Western Academy of Management（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nobuyuki Chikudate |
| ２．発表標題<br>Pipe Dream or Hope Regeneration by Future Theories in Fukushima:Ten Years after 2011’s Disasters |
| ３．学会等名<br>Academy of Management Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nobuyuki Chikudate |
| ２．発表標題<br>The Spellbinding Power of Reinforcing Safety Myths inside TEPCO: An Analysis of Fukushima Disaster |
| ３．学会等名<br>Academy of Management Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nobuyuki Chikudate |
| ２．発表標題<br>“Collective Myopia” as an Organizational Pathology |
| ３．学会等名<br>International Conference Business Ethics & Compliance in Asia（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nobuyuki Chikudate |
| ２．発表標題<br>Working and Having Fun in Resilience from Disaster: An In-depth Study in Japan |
| ３．学会等名<br>Academy of Management Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Nobuyuki Chikudate, Nadiatus Salama | 4．発行年<br>2021年 |
| 2．出版社<br>Peter Lang | 5．総ページ数<br>563 |
| 3．書名<br>Bartosz Makowicz (ed.), Global Ethics, Compliance & Integrity | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>築達　延征 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>白桃書房 | 5．総ページ数<br>196 |
| 3．書名<br>組織人間たちの集合近眼ー忖度と不祥事の体質ー | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|